

スペイン内戦と日中戦争にあらわれた ヒューマニズム

若松伸哉

1. 文学作品に見るスペイン内戦の痕跡

日本近代文学においてスペインとの関わりは、イギリス・フランス・ドイツなどといった国々に比べると決して大きくないが、文学者を含む日本の知識人たちがスペインに大きく目を向けた出来事として、1936年に起こったスペイン内戦がある。本稿ではこのスペイン内戦とその翌1937年に勃発する日中戦争に関して、日本の文学者がどのように反応したかを見てみたい。

1936年、スペインの総選挙において、マヌエル・アサーニャ率いる左派の人民戦線政府（共和国派）が成立し、それに対して同年7月にフランシスコ・フランコを中心とした右派の国民戦線（ナショナリスト派）がスペイン領モロッコにて反乱を起こしたことによって、いわゆるスペイン内戦がはじまる。国民戦線は1939年3月にマドリードをはじめスペイン全土を制圧し、以後フランコによる独裁政権が1975年まで続く。1936年から1939年にかけてスペイン全土を戦乱に巻き込んだこの内戦は、ごく大雑把な把握として、人民戦線がマルクス主義という左派陣営を代表し、国民戦線がファシズムという右派陣営を代表する戦争として、当時のヨーロッパのみならずアメリカや日本でも注目されている。こうした注目度の高さから、アメリカ人作家のアーネスト・ヘミングウェイやフランス人作家のアンドレ・マルローが参加（ともに人民戦線側）した戦争としても知られている。

ただし、スペイン内戦自体に直接言及した日本の小説はほとんどない。しかし、数少ない例として石川淳が内戦勃発の翌年に発表した小説「履霜」（『文芸春秋』1937・10）が挙げられる。石川淳は小説「普賢」（『作品』1936・6～9）

によって1936年下半年の第4回芥川賞を受賞したばかりであり、芥川賞を主催している『文芸春秋』掲載ということもあり、「履霜」は注目された作品だったことが想像される。

「履霜」は、京都大学経済学部出身で東京の商社に勤める毛利一郎とその妻・秋子を主人公として、一郎の学生時代の友人で左翼運動の活動家・折原紘が突然あらわれたことが契機となり、一郎のあり方に疑念を持った秋子が彼のもとを去る、というあらすじになっている。毛利一郎はかつて流行としての左翼思想にかぶれたマルクス・ボーイとして設定されており、今は左翼思想を捨てている。その毛利一郎の台詞に次のものがある。

「この街が近代都市の顔であるためには、どこか釘が弛んでゐるやうな気がするね。これは市民が一度も闘つたことのない町なんだ。曾て一度だつてここで市街戦が行はれた例があるか。上野の戦争、あれは市民が見物でしかないところの消防の出初式だ。爆弾で古美術を破壊してゐるマドリッドに比べれば、これは何とのんびりした風景だらう。〔…〕¹⁾」〔四〕

引用傍線部では、日本の上野の戦争（明治維新の戊辰戦争）と比較してスペイン内戦下のマドリッドで起こっている惨状に言及している。「上野の戦争」を「市民」による戦争として捉えないのは、明治維新を民主主義革命と捉えないコミンテルン（共産主義インターナショナル）による〈32年テーゼ²⁾〉を踏まえてのことだが、日本の近代化をめぐる状況に関わってスペイン内戦に言及しているこの台詞は、当時の日本における左派知識人たちの言説を反映していると思われ、興味深い。

しかし、この「履霜」が単行本『山桜』（昭南書房、1942・12）に収録される際に、明確にスペイン内戦に触れている先の引用文については大幅な削除・改稿が行われ、スペイン内戦への言及は無くなっている。後にも少し触れるが、軍国的風潮への抵抗を示した「マルスの歌」（『文学界』1938・1）において発禁処分を受けた石川淳が、強化される言論統制のなかで人民戦線への言及が当局の取り締まりに合うことを恐れたためだと推測される。

2. 人民戦線と〈ヒューマニズム〉

スペイン内戦が勃発した1936年、日本の文壇のなかでは〈ヒューマニズム〉という言葉が流行している。たとえば、文芸批評家・小林秀雄は「ヒューマニズム論」（『東京朝日新聞』1936・9・10）のなかで、「今日のような時期に、ヒューマニズムが問題になり、この言葉が明瞭性を欠くのは当たり前な事だ」と述べている。この言葉から1936年にヒューマニズムという言葉が流行し、流行ゆえに多義的に（＝「明瞭性を欠く」）使用されていた状況がよくわかる。

プロレタリア系の作家である森山啓と青野季吉も同時期に〈ヒューマニズム〉について言及している。森山は文芸雑誌『文学界』1936年9月号で行われた特集「ヒューマニズムの現代的意義」に寄せた「死の思想との袂別」において、自分が「ヒューマニズムの問題に参加したわけ」について、「自己の再生と成長を欲する」ためであり、それはさらに「いはゆる「全世界的なこと」に思ひを致す」ことと切り離し得ない」と書いている。

また一方の青野季吉は「現代ヒューマニズムの文学」（『新潮』1936・10）を著し、「現代のヒューマニズム」は「個人的人間の求道的精神を基盤とするものでは」無く、「『集団的』人間が時代の悪気流に抗して、人間的共感のうちに飽まで人間として生き抜かうとする意欲である」と述べている。

〈ヒューマニズム〉について森山が「全世界的なこと」と言い、青野が「『集団的』人間」と表現する背景には、1935年に反ファシズムを共同目標とする集団として、フランス社会党・急進社会党・フランス共産党からなるフランス人民戦線が成立し³⁾、同年、第七回コミンテルン大会で〈人民戦線テーゼ〉が採択されたことがあり、森山も青野もファシズムに抵抗する人民戦線にヒューマニズムの理念を見出していたことが想像できる。

次の二つの資料も同様に当時のヒューマニズムと人民戦線の関係を語っている。高沖陽造「ヒューマニズムにおける政治と文芸」（『日本評論』1936・10）は「今日のヒューマニズムは、文芸的には全人間の意志を表現する人民的なりアリズムとなり、政治的には人民戦線といった形で現はるべきであらう」と言い、小松清「ヒューマニズムを限定せよ」（『日本評論』1936・12）も、「ヒューマニズムの民衆化」を問題化し、ヒューマニズムが「人民戦線精神の肉体となつてゐる

る」と語っている。小松はまた同論のなかで「人間らしい生活感情の要求」が「ヒューマンイズムのもつとも本質的なエスプリ」とも書いている。

これらの資料を見てわかるように、このとき人民戦線は政治面におけるヒューマンイズムの具体的なあらわれとして想定されており、さらに高沖と小松の主張に注目すれば、民衆の人間としての意志や生活感情を表現することが彼らのヒューマンイズムの根幹にある点も了解できる。

1936年頃に流行する〈ヒューマンイズム〉は、第二次世界大戦を引き起こすファシズムの流れに対抗する民衆による世界的な人民戦線と強く結びつく側面があったわけだが、こうした人民戦線への期待は、1937年7月の日中戦争勃発による戦時下となった日本において取り締まりの対象となる。1937年12月15日には、日本での人民戦線結成を呼びかけた山川均・向坂逸郎・大森義太郎らが検挙される〈人民戦線事件〉が起これ、共産党員以外のマルクス主義者や自由主義者も検挙の対象となっている。先に述べた石川淳「マルスの歌」の掲載により発禁処分となった『文学界』1938年1月号は、〈人民戦線事件〉が起こった1937年12月に発売されており、戦時下となった日本において、まさに言論の取り締まりが強化されていくタイミングのなかで石川も受難にあったのである。

しかし、人民戦線は日本の左翼系知識人に大きな期待を抱かせた一方で、批判も見られる。1936年8月28日の『東京朝日新聞』には「首都マドリッドの恐怖！」の見出しでマドリッドにおける戦闘の様子が記事となっている。同記事では「赤色旗全市を蹂躪」「大寺院一夜に灰燼」「数千の右翼派を虐殺」との文字が大きく躍り、スペインの人民戦線派が多数の寺院を破壊し、そして数千人にものぼる国民戦線派の人間を虐殺したことを印象付けている。

この報道を受けて『日本浪漫派』のリーダー的存在であった保田与重郎は⁴⁾、「文芸時評」（『日本浪漫派』1936・10）において、「スペインの偉大な寺院の破壊も、その新しい人間のために必要な犠牲といふならば、古典の復興と防衛を血戦したかつてのヒューマンイズムの方向など考へてをかしい」と、古典の復興を目指したかつてのヒューマンイズムと比較しながら、寺院破壊という蛮行を行うスペイン人民戦線のヒューマンイズムを批判する。

人民戦線のこの破壊行為について改めて「僕は人民戦線に失望した」と語った保田与重郎「法王庁の発表について再び」（『コギト』1936・12）も、「我々はけふのヨーロッパの精神と彼らが防衛せんとするヒューマニズムが、日本の七十年昔の維新の群衆と同じていどの、群衆を根拠としてゐるものとして軽蔑すべきなのか。ヒューマニズムが簡単な合言葉とされて了つた現状は驚くに耐へたものがある」と、ヒューマニズムの言葉が合言葉となっている現状を嘆きながら、人民戦線とヒューマニズムが結びつけられて語られていることを批判している。

さきほど見てきたように、人民戦線は世界的かつ民衆的なヒューマニズムを体現したものとして語られていた存在ではあったが、一方で寺院破壊や虐殺といったヒューマニズムの理念と背馳する人民戦線派の民衆の無軌道な姿が、新聞報道やそれをうけての評論のなかで批判となる存在でもあったのだ。

3. 〈ヒューマニズム〉から語られる日中戦争

1936年7月にはじまるスペイン内戦と、それに関わる人民戦線を表現する言葉として語られてきた〈ヒューマニズム〉についてここまで述べてきたが、興味深いのは日中戦争後の文壇においても、〈ヒューマニズム〉という標語との連続性を考え得ることだ。

1937年7月の日中戦争勃発後の日本の文壇では戦争を題材とした小説の登場が望まれるが、そうした機運のなかで1938年に問題となった小説として、石川達三「生きてゐる兵隊」（『中央公論』1938・3）と火野葦平「麦と兵隊」（『改造』1938・8）が挙げられる。

「生きてゐる兵隊」は、1937年12月の南京占領に関与した日本軍の部隊に取材をして、医学士・農家の次男坊・校正係・従軍僧・小学校教師などを出自とする日本の兵士たちの戦場における葛藤や狂気を描く。本作品は兵士が市民から略奪を行う箇所や女性を含む中国市民を殺害する箇所などが問題となって、掲載誌の『中央公論』は即日発禁処分となり、作者の石川達三自身も有罪判決を受けている。なお作者の石川達三は、この三年前の1935年、日本のブラジル移民を描いた小説「蒼氓」で第1回芥川賞を受賞した作家であった。

火野葦平「麦と兵隊」は、作家・火野葦平が一兵士として参加した徐州作戦を小説化したもので、多大な売り上げを見せ、日中戦争期の代表的な戦争文学となる。この火野葦平も石川達三と同じく芥川賞作家で、前年1937年に小説「糞尿譚」で第6回芥川賞を受賞しており、授賞式は火野が兵士として出征していた中国の戦地において行われている。

火野は「麦と兵隊」の「前書」において、「私が従軍中毎日つけた日記を整理し清書したに過ぎないもの」と記し⁵⁾、虚構では無いリアリズムを強調している。作者が兵士であり、その日記を使用したという圧倒的な戦場のリアリズムが強力な宣伝となって、「麦と兵隊」は他を寄せ付けない、この年最大のベストセラーとなっている。以下、「麦と兵隊」が具体的にどのような観点で評価されたのか、いくつか同時代評を確認してみたい。

佐藤俊子「麦と兵隊」と「鮑慶郷」(『文芸』1938・9)は、「人間と人間との敵意、愛、憎みの接触」や「ヒューマニスティック」という言葉を使いながら「麦と兵隊」を評価し、名取勘助「小説月評」(『新潮』1938・9)もまた、「麦と兵隊」の「重大な要素」として「ヒューマニスティックの精神」を挙げる。本稿第1節でも1936年に〈ヒューマニズム〉に言及した一人として登場した森山啓も「陣中文学と文芸政策—(文芸時評)—」(『文学界』1938・9)において、「麦と兵隊」は、文学の叙述力と、ヒューマンな情感と、日本兵隊の精神をもって、戦地から写実的国民主義文学の尤なるもの、「日本人の精神における人間的、普遍的感情の表現をもゆるすことによつてそれらを交戦国民衆や海外読者にも読ませる価値を大きくした」と「麦と兵隊」を高く評価している。北岡史郎「文芸時評」(『若草』1938・11)は、「麦と兵隊」でも、その文学的のよさは、戦ひの厳肅さのなかに高く存するこのヒューマニスティックな大モラルである」と、「麦と兵隊」の文学的価値を「ヒューマニスティックな大モラル」に求め、橋爪政成「文芸時評 銃後の文学」(『九州文学』1938・11)も、小説としての「麦と兵隊」の評価について、「どこまでもヒューマンなもの、人間的なもの」にポイントを見出している。

同時代評の評言を簡単に確認したが、「麦と兵隊」を評価する際に、「ヒューマン」「ヒューマニスティック」あるいは「人間」といった表現が多く使用さ

れているのがよくわかる。戦場における兵士の生々しい記憶を書き付ける「麦と兵隊」が、人間的な情感をよく伝えるのはもちろんであり、中国兵の処刑に対して、「私は眼を反した。私は悪魔になつてはゐなかつた。私はそれを知り、深く安堵した」という「私」の描写で閉じられる作品の結末からもその人間的な感情は読み取られているだろう。

そしてさらに、作品の終盤で行軍する日本軍の統制された姿を見た「私」が、「全く自分がその荘厳なる脈動の中に居ることを感じた」印象的な「五月十九日」の場面にも注目してみたい。この場面では「私」は次のようにも独白している。

命の惜しくない者は誰も居ない。私も人一倍生命が惜しい。生命こそは最も尊きものである。然るに、この戦場に於て、何かしら、その尊い生命を容易に棄てさせるものがある。多くの兵隊は、家を持ち、妻を持ち、子を持ち、肉親を持ち、仕事を持つてゐる。しかも、何かしら、この戦場に於て、それらのことごとくを、容易に棄てさせるものがある。棄てて悔ひさせないものがある。多くの生命が失はれた。然も、誰も死んではゐない。何にも亡びてはゐないのだ。兵隊は、人間の抱く凡庸な思想を乗り越えた。死をも乗り越えた。それは大いなるものに向つて脈々と流れ、もり上つて行くものであるとともに、それらを押し流すひとつの大いなる高き力に身を委ねることでもある。又、祖国の行く道を祖国とともに行く兵隊の精神でもある。

祖国のために死を乗り越えて戦うそれぞれの一兵士の個人的な心情が、「大いなる高き力」あるいは「兵隊の精神」という集団的・普遍的な感情に統合されていく表現にも、個人的な感情ではなく、人間の持つ普遍的な感情である〈ヒューマニズム〉が読み取られていると想像できる。

当時戦争文学として多大な売れ行きを見せた「麦と兵隊」について称揚する際に使用される〈ヒューマン（人間）〉という言葉。この言葉は戦場での具体的感情に基づいたリアリズムとともに、個人的感情が普遍的な人間精神および統制された集団（軍隊≒国民）へと統合されていくプロセスをも評価していたと考えられる⁶⁾。

スペイン内戦（人民戦線）を語る際に〈ヒューマニズム〉という言葉が使われていたのは先に見たとおりだが、日中戦争を語る戦争文学についても〈ヒューマン〉という言葉が使われ、評価されていたのだ。そしてこうした言葉が、実際の戦場で起こっていることへの想像力を奪ってしまうことがより重要だろう⁷⁾。

スペイン内戦において使用された〈ヒューマニズム〉は、ファシズムに対抗するはずの非常に理念的な言葉であり概念だったが、保田与重郎が批判したように、およそヒューマニズムとは言いがたい人民戦線側の蛮行もその裏にはあった。一方で日中戦争を描いた「麦と兵隊」の評言にもあらわれる〈ヒューマン〉という言葉。この二つの言葉はもちろんそれぞれの内実は違うが、人間性を称揚する言葉としての共通性を持っている。ファシズムに対抗する人民戦線に使われたこの言葉が微妙にかたちを変えて、日本の大陸侵略を描く戦争文学についても使われていることになるのだ。戦争文学における〈ヒューマン〉や〈人間的〉という評価はその後の一つの定型となっていくが、しかしやはり「麦と兵隊」の示す戦場のリアリズムはかなり限定的なものだったと言わざるを得ない。

それは発禁処分となった石川達三の「生きてゐる兵隊」と比べれば明らかだろう。「生きてゐる兵隊」においても、祖国のために戦う兵士の誇りも描かれるものの、それ以上に日本の軍隊が占領地において行う略奪や殺害などの蛮行が描かれ、普通の人間をも蛮行に走らせてしまう戦場の狂気や、それゆえの葛藤などが繰り返し描かれている。

第二次世界大戦の前兆とも言える1936年のスペイン内戦と1937年の日中戦争について、日本においてそれらを語る際に使われていた〈ヒューマニズム〉や〈ヒューマン〉の言葉は、立場・視点が違えばまったく違う暴力的な物語が生まれる戦場への想像力というものを奪っていく。このように、一つの理念的な言葉（ここでは〈ヒューマニズム〉）が文学という虚構をめぐる場のなかで使用され、それが現実の政治的・社会的事象である戦争についての人々の想像力を狭めてしまうあり方が、スペイン内戦と日中戦争に関わる文学的言説のなかに見ることができるのだ。

*本稿は愛知県立大学日本スペイン人文社会科学シンポジウム「大航海時代からグローバル現代社会へのパラダイム—日本とスペインにとっての2つの地域世界、2つの戦争」(2016・7・27)での口頭発表を論文化したものである。また、本稿の作成にあたってはJSPS 科研費15K02243の助成を受けており、同科研費研究会での報告・議論が本稿の基礎となっている。特に保田与重郎のスペイン内戦への反応については、同研究会での西村将洋氏の報告による教示が大きく、謝意を表したい。同報告の内容については西村将洋「アフリカからアジアをみる—日中戦争期の保田與重郎とマルクス主義民族論」(『昭和文学研究』2017・3)として論文化されている。なお、本稿引用文中の旧漢字は新漢字に直し、ルビは省略した。

注

- 1) 「履霜」本文の引用は筑摩書房版『石川淳全集』第一巻(1989・5)より。傍線は稿者によるもの。
- 2) 1932年5月のコミンテルン(共産主義インターナショナル)において、「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」(32年テーゼ)が決定。当時の日本を半封建制体制と規定し、明治維新を民主主義革命と捉えず、まず民主主義革命を起こした後、プロレタリア革命を起こすべきという二段階革命を唱えた。この32年テーゼが当時の日本共産党の方針となる。
- 3) フランス人民戦線は翌1936年の選挙で政権奪取するも、同年発生したスペイン内戦への干渉をめぐり崩壊する。
- 4) 保田与重郎の「続友情のために」(『コギト』1934・10)や「後退する意識過剰—「日本浪漫派」について—」(『コギト』1935・1)、亀井勝一郎「奴隷なき希臘の国へ」(『日本浪漫派』1935・4)などに見られるように、このころ保田をはじめとした日本浪漫派のメンバーは、理想に向かって邁進するドン・キホーテという存在をロマンティズムの代表として評価しており、スペイン文学への意識も見られる。
- 5) 「麦と兵隊」の本文引用は初出より。
- 6) 五味淵典嗣「曖昧な戦場」(『昭和文学研究』2014・9)は、火野葦平「麦と兵隊」を含む日中戦争期の戦記テキストを検討し、自己を鍛え高める〈修行〉という特徴を挙げ、それが「〈主体化〉=〈国民化〉」へとつながることを指摘している。また、中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ』(青弓

社、2013・7) 第1章「[民族]の〈歴史性〉と[民衆]の〈普遍性〉」一鳥木健作『生活の探求』、火野葦平『麦と兵隊』は、「麦と兵隊」において「麦畑」のイメージを媒介として、「兵隊や農民は[国家]や[民族]を超える〈普遍〉的存在として表象される」点を指摘し、「一見ヒューマンスティックなこの論理が、帝国の拡張に寄与するものであることはいうまでもない」と論じている(53頁)。

- 7) 「麦と兵隊」と同時代の文学場の関係について考察する松本和也『昭和10年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』(立教大学出版会2015・3) 第17章「“戦場にいる文学者”からのメッセージ—火野葦平「麦と兵隊」は、「同作に満ち溢れるヒューマニズムという特質」が、「大文字の歴史をめぐる現実から国民の目を反らすべく機能した(させられた)側面は否定しきれない」と論じている(429頁)。

El Humanismo surgido en la Guerra Civil española y en la Segunda Guerra Chino-Japonesa

Shin'ya Wakamatsu

1. Huellas de la Guerra Civil española visibles en obras literarias

No cabe decir que la presencia de España en la literatura japonesa moderna sea demasiado grande, al menos si se la compara con la de países como Reino Unido, Francia o Alemania, pero entre los hechos que atrajeron fuertemente hacia España las miradas de literatos y, en general, de la intelectualidad japonesa, puede citarse la Guerra Civil española de 1936. En este trabajo se pretende ofrecer una visión de la forma en que los literatos japoneses reaccionaron ante esta guerra y ante la Segunda Guerra Chino-Japonesa, cuyo estallido se produjo un año después, en 1937.

Las elecciones generales celebradas en España en 1936 dieron paso a un gobierno del izquierdista Frente Popular (que constituirá el bando republicano) liderado por Manuel Azaña. Ante este hecho, en julio de ese mismo año, el derechista Frente Nacional (bando nacional) formado en torno a Francisco Franco, se sublevó en el Marruecos español, lo que dio comienzo a la Guerra Civil española. Para marzo de 1939 el Frente Nacional había extendido su dominio a Madrid y al resto del territorio español y a partir de este momento se inicia la dictadura franquista, que dura hasta 1975. Grosso modo, esta guerra civil, que entre 1936 y 1939 convirtió en escenario bélico todo el territorio español, se dirimió entre las filas izquierdistas del marxismo, representado por el Frente Popular, y las filas derechistas del fascismo, representado por el Frente Nacional, y fue seguida con atención no solo en Europa, sino también en países como Estados Unidos o Japón. Es también conocida por ser la guerra en la que, precisamente debido a esta gran

atención que despertó, participaron escritores como el norteamericano Ernest Hemingway o el francés André Malraux (ambos en el Frente Popular).

Si bien son muy pocas las novelas japonesas que mencionan de forma directa la Guerra Civil española en sí misma, entre los escasos ejemplos que encontramos podría citarse “Risō” (履霜, Escarcha bajo los pies) [revista *Bungei Shunjū*, octubre de 1937], una novela de Jun Ishikawa que fue publicada un año después del estallido de la contienda española. Ishikawa acababa de obtener el IV Premio Akutagawa, correspondiente al segundo semestre de 1936, por su novela “Fugen” (普賢, Bodhisattva) [revista *Sakuhin*, junio-septiembre de 1936]. Habiendo sido publicada en *Bungei Shunjū*, convocante del citado premio, cabe suponer que *Risō* atrajera un gran interés.

Risō está protagonizada por Ichirō Mōri, un hombre que tras cursar estudios en la Facultad de Economía de la Universidad de Kioto se ha colocado en una empresa comercial de Tokio, y por su esposa, Akiko. La repentina irrupción de Tadasu Orihara, activista de un movimiento izquierdista y amigo de Ichirō desde su época universitaria, da ocasión a que Akiko se plantee de forma crítica la actitud vital de Ichirō y termine abandonándolo. El argumento de la obra se desarrolla en torno a estos hechos. Ichirō Mōri es presentado como alguien que fue un *Marx boy*, un muchacho imbuido del pensamiento político izquierdista que se había popularizado en Japón en la época de su juventud, pero que actualmente reniega de dicho pensamiento. En los diálogos, Ichirō dice cosas como estas:

“Para ser un digno representante de la ciudad moderna, me da la impresión de que a esta ciudad habría que ajustarle un poco más las clavijas. En estas calles el pueblo no ha luchado ni una sola vez. ¿Acaso ha habido, en su pasado, un solo ejemplo de guerra urbana? Tenemos la Guerra de Ueno, sí, pero aquello fue algo así como las acrobacias que muestran los bomberos al inicio de su año laboral, un número del que los ciudadanos fueron meros espectadores. Comparado con lo que está ocurriendo de Madrid, donde se están cargando las

antigüedades a bombazos, lo de aquí es realmente bucólico. (...)”.¹

En el subrayado de la cita, el personaje alude a los trágicos momentos que se viven en el Madrid de la Guerra Civil, comparándolos con la llamada Guerra de Ueno (episodio de la Guerra Boshin, era Meiji). Que el protagonista no considere la Guerra de Ueno una guerra “popular” se debe a que se está ciñendo a lo establecido por la Tesis de 1932² de la Internacional Comunista, según la cual la Restauración Meiji no es una revolución democrática. Cabe pensar que esta exposición del protagonista, en la que alude a la Guerra Civil española al hablar de la situación en Japón relativa al proceso de modernización del país, refleja el discurso sostenido a la sazón por la intelectualidad izquierdista japonesa, siendo por tanto de interés.

Sin embargo, al quedar incluido “Risō” en el libro titulado *Yamazakura* (山桜, Cerezos silvestres) [*Shōnan Shobō*, diciembre de 1942], el texto correspondiente a la cita anteriormente referida sufrió amplias supresiones y modificaciones, de forma que la referencia a la Guerra Civil española quedó eliminada.

Se infiere que, en un contexto en el que se imponían cada vez mayores restricciones a la libertad de prensa y publicación, y tras haber visto proscrita su obra “Marusu no uta” (マルスの歌, La canción del Marte) [revista *Bungakukai*, enero de 1938], en la que mostraba resistencia a las corrientes militaristas, Ishikawa temió que su alusión al Frente Popular pudiera llamar la atención de los censores del régimen. Retomo el tema brevemente más abajo.

2. El Frente Popular y el humanismo

En 1936, año en que estalla la Guerra Civil española, estaba en boga entre los literatos del país la palabra *humanismo*. Por ejemplo, el crítico Hideo Kobayashi, en su obra “Hyūmanizumu-ron” (ヒューマニズム論, Sobre el humanismo) [periódico *Tōkyō Asahi Shimbun*, septiembre-octubre de 1936], sostiene que “en un periodo como el actual, es lógico que se cuestione el humanismo y que el propio término carezca de claridad”. Se desprende de esta afirmación que en 1939 la palabra

humanismo estaba en boga, y que debido a esa boga se hacía de ella un uso polisémico (“carezca de claridad”).

También Kei Moriyama y Suekichi Aono, escritores que se inscriben dentro de la corriente proletaria o proletarista, hacen mención del humanismo en esta misma época. En el escrito titulado “Shi no shisō to no beibetsu” (死の思想との袂別, Adiós a la ideología de la muerte), con el que contribuyó al especial “Hyūmanizumu no gendaiteki igi” (ヒューマニズムの現代的意義, Significación contemporánea del humanismo) publicado por la revista cultural *Bungakukai* en su número de septiembre de 1936, Moriyama sostiene, al hablar sobre las razones que le llevaron a implicarse en el problema del humanismo, que aspiraba a su propia regeneración y crecimiento, algo que no era posible separar del interés por los asuntos mundiales.

Por su parte, Aono publicó el artículo “Gendai hyūmanizumu no bungaku” (現代ヒューマニズムの文学, La literatura del humanismo contemporáneo) [revista *Shinchō*, octubre de 1936], en el que sostiene que el humanismo moderno no se basa en el espíritu de búsqueda individual de la verdad, sino que es el deseo que siente el hombre colectivo de hacer frente a las turbulencias de la época y vivir tenazmente como persona dentro de un ambiente de empatía humana.

Al tratar el tema del humanismo, Moriyama habla de los “asuntos mundiales” y Aono del “hombre colectivo”, expresiones bajo las cuales subyace la creación, en 1935, del Frente Popular de Francia³, formado por el Partido Socialista, el Partido Radical Socialista y el Partido Comunista de ese país con el objetivo común de luchar contra el fascismo, así como la adopción por el VII Congreso Mundial de la Internacional Comunista de la Tesis del Frente Popular. Cabe pensar que tanto Moriyama como Aono encontrasen en un frente popular antifascista el ideal del humanismo.

Los dos siguientes documentos exponen, igualmente, la relación entre el humanismo y los frentes populares de la época.

En su obra “Hyūmanizumu ni okeru seiji to bungei” (ヒューマニズムにおける政治と文芸, La política, la literatura y las artes en el humanismo) [revista *Nihon*

Hyōron, octubre de 1936], Yōzō Takaoki afirma que “el humanismo actual, en el terreno artístico y literario, se manifiesta a través de un realismo popular que expresa la voluntad de todos los seres humanos, y en el terreno político, debe manifestarse en la forma de un frente popular”, mientras que en “Hyumanizumu wo gentei seyo” (ヒューマニズムを限定せよ, Determinemos el humanismo) [*Nihon Hyōron*, diciembre de 1936], de Kiyoshi Komatsu, se aborda también el problema de la masificación del humanismo y se sostiene que este “es la forma corpórea del espíritu del frente popular”. Komatsu, en el citado ensayo, dice también que “las exigencias de los sentimientos y emociones de la vida diaria” es “el *esprit* esencial del humanismo”.

De la lectura de estos documentos se desprende que en aquella época los frentes populares eran considerados la manifestación concreta del humanismo en la esfera política, y si atendemos a las argumentaciones de Takaoki y Komatsu, convendremos que expresar la voluntad y los sentimientos y emociones de la vida diaria de las masas, en tanto que formadas por personas, estaba en lo más profundo del humanismo de estos dos intelectuales.

Así pues, ese humanismo que está en boga hacia el año 1936 aparece fuertemente unido a la idea de un frente popular de carácter mundial creado por las masas que se oponen a las tendencias fascistas, que van a desencadenar la Segunda Guerra Mundial. Sin embargo, las esperanzas de formar un frente popular de estas características van a ser objeto de represión en Japón, que a raíz del rompimiento de las hostilidades con China en julio de 1937 entra en estado de guerra. El día 15 de diciembre de 1937 ocurre el Incidente del Frente Popular, que acarreó la detención de Hitoshi Yamakawa, Itsurō Sakisaka, Yoshitarō Ōmori y otros, que habían hecho un llamamiento para la creación en Japón de un frente popular. La ola de detenciones afectó también a marxistas no miembros del Partido Comunista, así como a liberales.

El número de enero de 1938 de la revista *Bungakukai*, que, como se ha dicho más arriba, fue intervenido por la autoridad debido a la inclusión en el mismo de la

obra de *Marusu no uta*, de Jun Ishikawa, había sido puesto a la venta en diciembre de 1937, mes en que ocurrió el referido Incidente del Frente Popular. Vemos, pues, cómo esta dura prueba para Ishikawa se enmarca temporalmente en un periodo en que, con Japón ya inmerso en la guerra, el control de la prensa y las publicaciones va haciéndose más estricto.

Si bien es cierto que la idea de un frente popular creó grandes expectativas entre los intelectuales japoneses de izquierdas, también encontramos críticas. En el periódico *Tōkyō Asahi Shimbun* del día 28 de agosto de 1936 apareció, bajo el titular “¡Terror en la capital, Madrid!”, un artículo sobre los combates en dicha ciudad. Con resaltados como “Toda la ciudad devastada bajo la bandera roja”, “Templos reducidos a cenizas de la noche a la mañana” o “Matanzas de miles de derechistas”, se recalca que los miembros del Frente Popular español están destruyendo una gran cantidad de templos y que el número de integrantes del Frente Nacional asesinados asciende a varios millares.

Saliendo al paso de este artículo, en su columna de crítica literaria “Bungei jihyō” aparecida en el número de octubre de 1936 de la revista *Nihon Rōmanha*, de la que era figura líder, Yojūrō Yasuda⁴ asevera que “si se pretende que la destrucción de los magníficos templos españoles sea un sacrificio necesario para ese nuevo hombre, entonces es ridículo pensar que se esté en la misma línea del antiguo humanismo, que luchó por la reconstrucción y protección del clasicismo”. De esta forma, sentando una comparación con el humanismo de antaño, que aspiró a hacer resurgir el mundo clásico, critica el humanismo del Frente Popular español, que comete actos tan vandálicos como la destrucción de templos.

En “Hōōchō no happyō ni tsuite futatabi” (法王庁の発表について再び, Una vez más, sobre el anuncio del Vaticano) [revista *Kogito*, diciembre de 1936], un artículo en el que vuelve a decir, en relación con la actividad destructiva del Frente Popular, que este le ha decepcionado, Yasuda se lamenta de que la palabra *humanismo* sea utilizada como consigna y critica que se hable de frente popular y de humanismo como de un todo indisoluble: “¿Tendremos que despreciar el espíritu

de la Europa de hoy en día, el humanismo que ellos se proponen defender, como algo que encuentra su apoyo en unas masas del mismo nivel que aquellas otras masas de la restauración que ocurrió en Japón hace 70 años? No deja de sorprender esta situación en la que *humanismo* se ha convertido en una consigna facilona”.

Como se ha visto más arriba, si bien los frentes populares eran presentados como entidades que encarnaban un humanismo mundial y de masas, al mismo tiempo el comportamiento desenfrenado de las masas del bando del frente popular, que cometen acciones tan incompatibles con el humanismo como destruir templos y cometer matanzas, es objeto de críticas tanto en las informaciones de prensa como en los artículos de crítica publicados en respuesta a tales informaciones.

3. La Segunda Guerra Chino-Japonesa desde la perspectiva del humanismo

Se ha tratado hasta aquí de la Guerra Civil española, que comenzó en julio de 1936, y de la palabra *humanismo*, presentada como expresión del frente popular implicado en la contienda, pero lo interesante es que también en el mundo literario japonés posterior a la Segunda Guerra Chino-Japonesa es posible encontrar una continuidad con el *humanismo* como consigna.

En el mundo literario japonés posterior al estallido de la Segunda Guerra Chino-Japonesa (julio de 1937), se reclamaba la aparición de novelas que tomasen por tema la guerra, y entre las novelas que dentro de esa tendencia causaron polémica en 1938, pueden citarse “Ikite iru heitai” (生きてゐる兵隊, Soldados vivos) [revista *Chūō Kōron*, marzo de 1936], de Tatsuzō Ishikawa y “Mugi to heitai” (麦と兵隊, Trigo y soldados) [revista *Kaizō*, agosto de 1938], de Ashihei Hino.

Ikite iru heitai, basada en materiales recogidos de las unidades del ejército japonés implicadas en la ocupación de Nankín de diciembre de 1937, describe los conflictos mentales desencadenados y la locura imperante en el campo de batalla al que marcharon como soldados personas de orígenes tan diversos como doctores en medicina, hijos no primogénitos de familias del campo, correctores de pruebas,

monjes de campaña o profesores de primaria. Algunos pasajes de la obra en los que los soldados aparecían saqueando las propiedades de civiles o asesinando a civiles chinos, incluyendo mujeres, fueron considerados objetables. La revista en la que fue publicada la historia, *Chūō Kōron*, fue cerrada inmediatamente por la autoridad y el propio Ishikawa juzgado y hallado culpable. Tres años antes, en 1935, Ishikawa se había hecho acreedor al I Premio Akutagawa por su novela *Sōbō* (蒼氓, El pueblo), que describe la emigración japonesa a Brasil.

Mugi to heitai, de Hino, es una narración novelada de la batalla de Xuzhou, en la que el autor participó como un soldado más. Fue un gran éxito de ventas, convirtiéndose en uno de los ejemplos más destacados de la literatura bélica de la época de la Segunda Guerra Chino-Japonesa.

Al igual que Ishikawa, Hino tenía en su haber el Premio Akutagawa, cuya sexta edición había ganado en 1937 con su novela “Funnyōtan” (糞尿譚, Historias fecales). La ceremonia de entrega del premio se llevó a cabo en la zona de China en conflicto adonde Hino había sido enviado como soldado.

En el prólogo de *Mugi to heitai*, Hino sostiene: “[Mi obra] no es más que la versión ordenada y pasada a limpio del diario que escribí todos los días durante mi servicio en el ejército”⁵. Hace, pues, hincapié en su realismo y en que no se trata de una ficción. Con el potente reclamo que suponía su abrumador realismo de campo de batalla, siendo su autor un soldado que utilizaba como base su propio diario, la novela se convirtió en el libro más vendido del año, a gran distancia del resto. Se exponen a continuación algunos ejemplos de la crítica de la época para mostrar desde qué perspectivas en concreto fue valorada esta novela.

En su reseña “Mugi to heitai to Paoshīshan” (麦と兵隊と鮑慶郷, Trigo y soldados, y Paoshīshan) [revista *Bungei*, septiembre de 1938], Toshiko Satō utiliza en su valoración de *Mugi to heitai* expresiones como “contactos de enemistad, amor y odio entre humanos” o “humanístico”; Kansuke Natori, en la columna “Shōsetsu Geppyō” (小説月評, Recensión mensual de novelas) [revista *Shinchō*, septiembre de 1938] sitúa el “espíritu humanístico” entre los elementos de mayor entidad de

Mugi to heitai.

Kei Moriyama, que aparece en el primer apartado de este trabajo entre los escritores que hicieron mención del humanismo en 1936, en un artículo titulado “Jinchū bungaku to bungei seisaku (Bungei jihyō)” (陣中文学と文芸政策—(文芸時評)—, Literatura de campaña y políticas culturales –Crónica literaria y artística—) [revista *Bungeikai*, septiembre de 1938], hace una alta valoración de *Mugi to heitai*, presentándolo como “un soberbio ejemplo de literatura realista nacionalista desde el frente, con potencia narrativa, sentimiento humano y con el espíritu de las tropas japonesas”, añadiendo que “dando cabida también a la expresión de las emociones humanas y universales que se dan en el espíritu de los japoneses, las hace más dignas de ser leídas tanto por el pueblo beligerante como por los lectores extranjeros”. En la columna “Bungei Jihyō” (文芸時評, Crónica literaria y artística) [revista *Wakakusa*, noviembre de 1938], Shirō Kitaoka afirma que “el mayor mérito literario de *Mugi to heitai* es esta gran moral humanística que ondea alto dentro del rigor de la batalla”, atribuyendo el mayor valor literario de *Mugi to heitai* a esa gran moral humanística; también Masanari Hashizume, en “Bungei jihyō: Jūgo no bungaku” (文芸時評：銃後の文学, Crónica literaria y artística: La literatura de retaguardia) [revista *Kyūshū Bungaku*, noviembre de 1938], al referirse al valor novelístico de *Mugi to heitai*, lo cifra en “lo que tiene de infinitamente humano”.

Este sencillo repaso por las expresiones más utilizadas en las reseñas críticas de la época permite comprobar que, al abordar la obra *Mugi to heitai*, se utilizaron en numerosas ocasiones palabras como “humano”, “humanístico” o “(ser) humano”. Queda fuera de toda duda que *Mugi to heitai*, donde se consignan los vívidos recuerdos de un soldado en el campo de batalla, transmite muy bien el sentimiento humano, pudiéndose obtener un buen panorama de las emociones humanas en el desenlace, en el que, hablando acerca de la ejecución de un soldado chino que ha presenciado, el yo narrativo se describe a sí mismo, diciendo: “Aparté mi vista de la escena. Yo no me había convertido en un demonio. Y sentí un gran alivio al saberlo”.

Conviene fijarse, asimismo, en una escena de fuerte impacto de la parte final del libro, la correspondiente al día 19 de mayo, en la que el yo, que contempla la disciplinada marcha del ejército japonés, dice sentirse “por entero inmerso en esa majestuosa pulsión”. En esta escena, el yo monologa de esta forma:

“No hay nadie que no dé valor a su vida. Yo le doy más valor que nadie. La cosa más sagrada es la vida. Y sin embargo, en este campo de batalla, hay algo, quién sabe qué, que te hace renunciar fácilmente a esa vida tan sagrada. Muchos soldados tiene casa, tienen esposa, hijos, una familia, un trabajo. Aun así, quién sabe qué será, hay en este campo de batalla algo que les hace renunciar fácilmente a todas esas cosas. Algo que les impide arrepentirse de haber renunciado a ellas. Se han perdido muchas vidas. Es como si no hubiera muerto nadie. Porque nada se ha extinguido. Los soldados han superado el mediocre pensamiento de la gente. Y han superado también la muerte. Es algo que fluye ininterrumpidamente en dirección a algo grandioso, va elevándose y cobrando fuerza, y es al mismo entregarse a una fuerza grandiosa, excelsa, que se lleva por delante todas esas cosas. Y es también el espíritu de la tropa, que les lleva a tomar, junto a la patria, el camino que esta ha tomado”.

Puede imaginarse que también se creía ver “humanismo”, no como sentimiento individual sino como sentimiento universal del ser humano, en las expresiones utilizadas para explicar cómo el estado emocional individual de cada uno de los soldados que luchaban por la patria “superando la muerte” iba quedando integrado en un sentimiento colectivo y universal identificable con esa “una fuerza grandiosa, excelsa” o con el “espíritu de la tropa”.

La palabra más utilizada para elogiar *Mugi to heitai*, ejemplo de literatura de guerra de la época que alcanzó unas enormes ventas, es “(ser) humano”. Cabe imaginar que con esta palabra se valoraba, además del realismo basado en los sentimientos concretos nacidos en el campo de batalla, el proceso por el que los

sentimientos individuales iban quedando integrados en el espíritu humano universal o en un colectivo (con una equivalencia aproximada entre ejército y pueblo) perfectamente dirigido y disciplinado⁶.

Se ha expuesto ya cómo, al tratar el tema de la Guerra Civil española (del Frente Popular), se utilizó a menudo la palabra humanismo. También al tratar la literatura de guerra que toma por tema la Segunda Guerra Chino-Japonesa se valoró las obras utilizando la palabra “humano”. Lo importante es percatarse de que estas palabras tuvieron como efecto último privar de la capacidad de imaginar acerca de lo que realmente ocurría en los campos de batalla⁷.

Si bien la palabra *humanismo* utilizada en relación con la Guerra Civil española tenía un carácter marcadamente ideal, era un concepto con el que se pretendía luchar contra el fascismo, ocultaba tras de sí, como denuncia Yojūrō Yasuda, actos vandálicos cometidos por el bando del Frente Popular que de ningún modo podían calificarse de humanistas. Por otra parte, está también la idea de lo “humano” tal como aparece en las recensiones de *Mugi to heitai*, que describe la Segunda Guerra Chino-Japonesa. Es obvio que los entresijos de los dos términos son diferentes, pero ambos tienen en común que sirven para ensalzar la naturaleza humana. Hallamos que la misma palabra que había sido aplicada al Frente Popular, opositor del fascismo, variando ligeramente su forma, se aplicó también al hablar de la literatura de guerra que describe la invasión japonesa del continente. La valoración de “humano” en el contexto de la literatura de guerra con el paso del tiempo se irá convirtiendo en un patrón fijo. Sin embargo, hay que decir que el realismo de campo de batalla que muestra *Mugi to heitai* es un realismo considerablemente limitado.

Esto queda de manifiesto si lo comparamos con *Ikite iru heitai*, de Ishikawa Tatsuzō, que fue proscrito. Si bien en *Ikite iru heitai* también se describe el sentimiento de orgullo de los soldados que luchan por la patria, aún en mayor medida se describen los saqueos, matanzas y otros actos de barbarie cometidos por las tropas japonesas en las zonas ocupadas. Junto a ello, se describe también

repetidamente la locura imperante en el campo de batalla, que acaba llevando a seres humanos normales a cometer estas acciones, los conflictos mentales desencadenados debido a esta situación y otros aspectos.

Las palabras *humanismo* y *humano*, usadas en Japón al tratar la Guerra Civil española de 1936 y la Segunda Guerra Chino-Japonesa de 1937, conflictos de los que puede decirse que presagian la Segunda Guerra Mundial, fueron debilitando la capacidad de imaginar los campos de batalla como lugares en los que pueden originarse historias violentas radicalmente diversas según cuál sea la posición o perspectiva desde la que se observe. Así, puede observarse cómo, dentro del discurso literario referente a estas dos guerras, una palabra que expresa una idea (en este caso, humanismo) es utilizada en el espacio literario, un espacio abierto en torno a la ficción, para acabar causando un menoscabo en la capacidad de las personas de imaginar la guerra, que es un fenómeno político y social real.

Nota del autor

Este trabajo es la plasmación escrita de la exposición oral que realicé en el Simposio Hispano-Japonés 2016, PARADIGMA ENTRE LO LOCAL Y LO GLOBAL, DE LA ERA DE LOS DESCUBRIMIENTOS A LA SOCIEDAD CONTEMPRÁNEA: DOS REGIONES Y DOS GUERRAS PARA ESPAÑA Y JAPÓN [27 de julio de 2016]. Por otra parte, para elaborar este trabajo se ha recibido la subvención JSPS Kakenhi 15K02243, y las presentaciones y discusiones realizadas por el grupo de investigación formado por esta ayuda financiera constituye su base. Especialmente en lo relativo a la reacción de Yojūrō Yasuda a la Guerra Civil española, me ha resultado muy inspirador la presentación impartida en dicha ocasión por Masahiro Nishimura, a quien desearía hacer llegar mi agradecimiento. Dicho trabajo ha sido publicado por él en el artículo titulado, “Mirando Asia desde África: Yojūrō Yasuda durante el periodo de la guerra chino-japonesa y la teoría marxista sobre la Nación”, en *Shōwa Bungaku Kenkyū (Estudios literarios del periodo Shōwa)*, marzo de 2017.

Notas

- 1 La cita del texto principal de *Risō* se ha extraído del primer tomo de *Ishikawa Jun zenshū* (石川淳全集, Obras completas de Jun Ishikawa) [mayo de 1989] de la editorial Chikuma Shobō. El subrayado es del autor de este trabajo.
- 2 La Internacional Comunista estableció en mayo de 1932 la Tesis relativa a la situación en Japón y a la misión del Partido Comunista de Japón (Tesis de 1932). Definió el Japón de la época como un régimen semifeudal, interpretó que la Restauración Meiji no había sido una revolución democrática y propugnó una revolución en dos etapas, la primera democrática y la segunda proletaria. Esta Tesis de 1932 se convertiría en la línea maestra de actuación para el Partido Comunista de Japón.
- 3 El Frente Popular de Francia consiguió hacerse con el poder en las elecciones de 1936, pero se desmoronó un año más tarde a consecuencia de las disensiones en torno a la intervención en la Guerra Civil española.
- 4 Como se aprecia en “Zoku Yūjō no tame ni” (続友情のために, Por la amistad, continuación) [revista *Kogito*, octubre de 1934] o “Kōtai suru ishiki kajō: Nihon Rōmanha ni tsuite” (後退する意識過剰—「日本ロマン派について」—, Hiperconciencia en retroceso: Sobre la Escuela Romántica japonesa) [revista *Kogito*, enero de 1935], ambos de Yojūrō Yasuda, o en “Dorei naki Girisha no kuni e” (奴隷なき希臘の国へ, Hacia una Grecia sin esclavos) [revista *Nihon Rōmanha*, abril de 1935], de Katsuichirō Kamei, en aquella época Yasuda y los otros miembros de la escuela romántica japonesa se fijaron en la literatura española y juzgaron a Don Quijote, que avanza imparable hacia un ideal, una figura representativa del romanticismo.
- 5 La cita es de la aparición inicial de la obra.
- 6 “Aimai na senjō” (曖昧な戦場, El ambiguo campo de batalla) [revista *Shōwa Bungaku Kenkyū*, septiembre de 2014], de Norisugu Gomibuchi, estudia los textos de las memorias de guerra de la época de la Segunda Guerra Chino-Japonesa, entre ellos *Mugi to heitai*, de Ashihei Hino, y destaca como una de sus características la idea de ascesis o adiestramiento para ejercitar el yo, señalando que esto se vincula a la sujeción entendida como formación del pueblo o nación. Por otra parte, Izumi Nakaya en el Capítulo I “Minzoku no rekishisei to minshū no fuhensei: Shimaki Kensaku: *Seikatsu no tankyū*, Hino Ashihei: *Mugi to heitai*” (「民族」の〈歴史性〉と「民衆」の〈普遍性〉—島木健作『生活の探求』、火野葦平『麦と兵隊』—, Historicidad de las etnias y universalidad de las masas: *Seikatsu no tankyū*, de Kensaku Shimaki, y *Mugi to heitai*, de Ashihei Hino) de su obra “Sono minshū to wa dare na no ka: Jendā, kaikyū, aidentiti” (その民衆とは誰なのか、ジェンダー・階

級・アイデンティティ, ¿Quién es ese pueblo? Género, clase e identidad) [Seikyūsha, julio de 2013], señala que en *Mugi to heitai*, mediante la imagen del campo de trigo, “las tropas y el campesinado son representados como entidades universales, más allá de los conceptos de Estado o etnia”, y añade que “huelga decir que esta lógica, aparentemente humanística, contribuye a la expansión del imperio” (pág. 53).

- 7 En el Capítulo XVII “‘Senjō ni iru bungakusha’ kara no messēji: Hino Ashihei: *Mugi to heitai*” (戦場にいる文学者のメッセージ—火野葦平「麦と兵隊」—, El mensaje de ‘Senjō ni iru bungakusha’: *Mugi to heitai*, de Ashihei Hino) de su obra *Shōwa 10-nendai no bungakujō wo kangaeru: shinjin, Dazai Osamu, sensō bungaku* (昭和10年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学, La escena literaria de los años 10: Shinjin, Osamu Dazai y la literatura de guerra) [Rikyō Daigaku Shuppansha, marzo de 2015], Kazuya Matsumoto sostiene sobre el “peculiar humanismo que colma esta obra”, que “entre sus facetas, tiene innegablemente la de haber funcionado (o haber sido hecho funcionar) para apartar la vista del pueblo de la realidad de la historia con mayúsculas” (pág. 429).